

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第170号（2020年7月）



白井啓治

（十）静かに寝転んで省エネ

（2009年7月17日）

『風がちょっと立ちどまって藪の中』

雨が降るのか降らないのかハッキリしない日が続く。湿度だけが高く、ドロンとした陽気である。こんな陽気では風も走るのを嫌うのだろうか、ノロノロ流れては直ぐに立ちどまってしまふ。こんな日の雑木林の散歩を喜んでいるのは数ツ蚊だけである。

ノロノロ風に合わせて歩いてみると、たちどころに数箇所も血を吸われてしまふ。しかも神経の過敏な所を狙って吸われるのだから堪らない。掻くまいと思ってもつい手がいつてしまふ。一端大きく掻いてしまふと、もう収まりがつかない。家に帰って、痒み止めの薬を塗っても間に合わない。

昨年もそうだったような気がするが、じとじとした長雨のない、それでいて不快な暑さの梅雨である。局地的な豪雨のおかげで、梅雨の総降雨量としては確保されているようであるが、本当に大丈夫なのだろうか。

石油の高騰で何もかもが値上がりをしている。そのくせ一酸化炭素の排出量は膨らむばかりである。地球の温暖化は止まる事はないだろう。洞爺湖サミットでも実質的な事は何も決定されていないし、危機を叫び、デモを行なう人たちにおいても、実質的な改善行動は誰一人としてはいない。



（絵：兼平智恵子）

一酸化炭素の排出を少しでも抑えようというのであれば、デモなんかやってはいけない。人間興奮すると、一酸化炭素の排出する量が増えるからである。だから私は、穏やかに穏やかに、怒らず動かずに実践している。猫の耳ちゃんを抱いて一日静かに寝転んで、徹底した省エネに努めている。

動かないから腹も空かない。糖尿病治療にも役立つ。

毎年、夏になって暑さに耐えているときに自虐的衝動に駆られて一度はやってみる事がある。真夏の行事のようなものであるが、今年はその行事は止めにするにした。

『俺の血を吸う蚊をじっと見ていたら満腹して飛べなくなった。ざまあみると叩き潰してやった、俺の血無駄になった』

この夏はこのエネルギーの無駄遣いは決してやるまいと心に決めた。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

“ふるさと風”十五年目に入り… 木村 進

新型コロナウィルスでの自粛が続く、本会報も置き場を失い低迷しておりますが、徐々にまた元に戻りつつあります。本誌「ふるさと風」も創刊から14年を過ぎ、ようやく目標の15年目に突入しました。「霞ヶ浦周辺地域の歴史・文化の再発見と創造」をテーマに毎月、会員各自が誰一人休むことなく、それぞれの想いなどをこの誌面につぶやいてきました。昨年の六月末に、この会の主査であった脚本家の白井啓治さんが突然の病でなくなられ、それを追うように半年後に県の獣医師でもあった菅原茂美さんが後を追うようにして、お亡くなりになりました。残されたメンバーも多くはなく、周りからは「大丈夫なのか？」など心配の声も聞かれました。お二人の存在があまりにも大きかったためにその心配は当然でした。会としても「当面は新たな主査は設けず

皆で力を合わせて続けて行きましょう」という事になりました。そしてやっと目標の十五年目に突入です。至らない事は山ほどありますが、先ずはこの先一年を乗り切りたいと思います。応援よろしくお願いします。毎月、会報を楽しみに待っていてくださる方、また、「頑張つてー」とか「前よりちよつとつまらない」などと言ってくださる方もおられますが、たとえどんな意見でもいただけるのは嬉しいです。読んでいただけている証拠だからです。面白くなく、読む気も起こらなければ意見など出てきません。少しは関心を持ったからこそ意見が出るのです。これからどんな意見にも耳を傾けたいと思っていますので忌憚のないご意見を是非お寄せください。

地域に眠る埋もれた歴史(62) 木村 進

## 【八郷地区】(5)

## 2 柿岡地区

### 2.5 柿岡八坂神社

柿岡の街は八郷の中の中心であったところで、県道7号線(石岡〜真壁)の道路に沿って昔からの街並みが続いている。

柿岡の街並みは石岡に近い側から「下宿」「新宿」「上宿」となっている。中心部に新宿があり、ここに「八坂神社」がある。

神社の入口に柿岡の道路元標も置かれている。この神社では毎年7月第3または第4日曜日午後2時から9時まで柿岡最大の祭り「祇園祭」が行われる。



神社の境内には樹齢 400 年くらいの大きなケヤキの木があります。

この祭りの由来は、市の説明では「享禄年間(1528〜1531)に、柿岡城主の長倉常陸守義村が那珂郡長倉村から神霊を遷座奉斎したのが創建と云われています。」と書かれている。



祭り(7月)の時に撮った写真を載せておきます。柿岡新宿の通りに山車が出てきました。この祭りは八坂神社の祇園祭です。祭りのスタイルは「石岡のお祭り」と似ています。お囃子も伝統のもので、この祭りにはからくり人形が出ます。

八坂神社の脇から奥に入る道が有り、裏手に回ると謎の建物を発見しました。「正観音堂？」よく読めません。古いお墓もあります。柿岡氏の菩提を弔っているのかもしれませんが、何も説明はありません。

左手に小さな神社と境内社のような小さな堂宇が二つあります。左手奥の堂宇は「子安観音」右手には石の地蔵が置かれていました。

### 2.6 柿岡八幡神社

柿岡上宿の信号を小幡の方(南西)に少し入った右側に「八幡神社」があります。

この神社は毎年9月の中秋の名月の晩に「じゃかもこじゃん」という神楽(代々神楽)が奉納されます。この「じゃかもこじゃん」は400年ほど前から始まったとされ、昔は夜9時ころから始めたようですが、時代の流れで今は夜7時頃から始まります。それでも、12座ある神楽が終わるのは夜10時頃になってしまいます。

文禄4年(1595)柿岡城主となった長倉義興が八幡神社を建立し、伊勢神宮より二十四神楽の

うちの十二神楽舞を持ち帰り、八幡神社へ奉納したのが起源とされています。



「じゃかもこじゃん」の老翁（おきな）

#### 〈荒宿のささら〉

柿岡のお祭り（八坂神社の祇園祭）の出し物に旧八郷町柿岡の八幡町（荒宿、西町、上宿、仲町）に伝わる「ささら」が出る。



ささら

祭り前の市役所支所にささらが展示された。

石岡の「ささら」と同じく棒ささらである。また、このささらは、周りを布で覆っている車のついていない四角い櫓の中に入って踊る。移動するときはこの櫓を人が担ぎ上げて神輿のように練りながら進む。

## 2.7 佐久の大杉 石岡市佐久 622

この大杉は丸山古墳の裏手（北側）にあたる佐久の鹿島神社に昔から御神木として保存されてきた。目通り 8.8 m 樹高 20 m 推定樹齢 1300 年以上の巨木です。

鹿島神社は室町時代の創建で、その時代にすでに千年近い杉と言われてきました。上部の樹枝も少なくなっていますが、緑の葉をつけていました。見学用に杉の周りに板で廻廊が設置されています。



鹿島神社と佐久の大杉

「佐久の大スギ樹勢回復治療経過」

平成 8 年頃から特に樹勢の衰退が目立ち始め、樹木医の調査結果から土壌環境の悪化が指摘

され、応急対策として灌水作業がとられ平成 9 年度から県、町、大杉保存会、樹木医が一丸となり樹勢回復の治療に取り組みました。特に土壌改良作業が主とされたが、大枝落下防止に鋼管支柱等の取り付けや、樹幹の亀裂部分に欠落防止に特殊な樹脂が使用され施工されました。平成 12 年度をもって樹勢回復の作業が終了しました。現在では着葉量も増加し緑も益々濃くなって来ました。又ここに作られた歩廊は土壌改良作業により発根した多数の細根を保護する為に樹木医の橋本先生の寄付により作られました。この巨木を後世に残す為にも見学者の皆様も歩廊からのみ見学されますようご協力下さい。（平成 13 年 4 月「佐久の大杉」保存会）

県指定天延記念物「佐久の大杉」

関東の杉では 1300 年の樹齢を持つ杉は他にはほとんどないのではないだろうか。県の天然記念物に指定されている。

## 我が労音史（20）

木下明男

20 代に参加した労音運動は、1970 年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1990 年の社会情勢と音楽状況

南アフリカの黒人解放指導者ネルソン・マンデラ氏が 27 年ぶりに開放される。（5 年後大統領

に選出。ソ連が共産党独裁を放棄し大統領制を導入。(M・ゴルバチョフが初代大統領)バルト三国(エストニア・ラトヴィア・リトアニア)が独立宣言し各共和国が主権を宣言。イラクがクウェートに侵攻し、ドイツ統一が成立する。(西ドイツが東ドイツを併合)東証株価が3万円を割る大暴落し円相場が急落。(バブル経済崩落の始まり)衆院選で自民党が安定多数を確保。

芸術文化振興基金が100億円の基金で発足。企業メセナ協議会が発足。舞台入場税対策連絡会議(入対連)が芸術文化振興連絡会議(PAN)に名称変更。諏訪内昌子(V)がチャイコフスキーコンクールで優勝。日本バイオリンがチャイコフスキー国際コンクールに世界唯一の協賛団体となる。第12回シヨパン国際コンクールにサントリーが特別賞450万円(本賞は15万円)を寄付。ソ連のロストロポーヴィッチ夫妻が16年ぶりに市民権を回復し国内で公演が開催。サントリー音楽財団が「芥川作曲賞」制定。イタリア・フィレンツェで開催のカサド国際チェロコンクールで向山佳絵子が優勝。イタリアのロン・ティボ国際コンクールヴァイオリン部門で小林美恵が優勝。武満徹が国際モリス・ラヴェル賞受賞。東京都芸術文化会館が東京芸術劇場の名称で開設。(池袋西口)

この年逝去した、音楽家・文化人・栗田安彦(オペラ演出家)渡辺暁雄(指揮者)土田貞夫(音楽美学)小原安正(ギタリスト)小倉朗(作曲家)松下真一(作曲家)古在由重(哲学者)藤山寛美(喜劇)土門拳(写真家)ミカエノ(西フラメンコギタリスト)コープランド(米作曲家)バーン・スタイン(米作曲家)アート・ブレイキー(米ジャズドラマー)。

## 1980年の労音の動き

ブロック・地域に根差した労音運動の構築と言う方針での労音作りは今年で6年目になる。東部・南部・都心に続き、大久保会館を拠点に西武と新宿、十条センターを中心に北部と城北、都下が新たに独立採算体制へ移行し、東京労音の全ブロックが独立労音へと進むことが確認された。また府中センターが開設され、活動拠点として承認された。3ヶ年計画の最終年度として、職場・地域・学園にサークルを基礎とした運動を進めてきた。また独立労音初年度として、積極的な地域例会の実現と中央例会への協力共同の関係が生まれた。成果として、前年比10%増都下ブロックでは3倍強となった。「センター例会」が企画され、地域活動に根ざしたセンターとしての基盤が生まれる。中央例会は一定の成果が生まれたとはいえ、一般参加者の比率が高く、マスコミ依拠の宣伝頼っている状況だった。月10000名年間120000名を目標としたが年間も8000名に留まった。独立労音の運動を進める課題は相互交流として位置づけ、泊まり込み委員会(東部センター)新年交流集会(十条センター)委員交流会(大久保会館)を開催した。

この年取り組んだ例会は、クラシック24種35例会、ポピュラー22種44例会、伝統音楽12種21例会、その中でも都下・東部・城北ブロックは活動拠点(地域センター)を生かし例会数を大きく前進させた。海外音楽シリーズは「アヤスタン」(アルメニア民族歌舞団)を招聘し、全国の共同企画の先進として東京で8例会を各地域で取り組む。「エルネストカブール」(ボリビア・チャラ

ンゴ奏者)も都心・西武・都下ブロックで取り組み、何れも満席で成功させる。「高橋竹山」(津軽三味線)は秋・冬の2回に分け成功させ、横浜や関東労音との共同企画としても大きく前進した。

「マンハッタンバレエ」(アメリカ)は前年度に続く取り組みだったが、有効な手立てが打てぬまま大きな赤字を生んだ。「プリセツカヤと輝けるソ連バレエのスターたち」(ソ連)の例会は、東京文化会館・浦和市民文化センターはともに大きな成功をした。東京文化会館小ホール企画として取り組んだ海外演奏家シリーズは、話題性の企画創りが出来ず会員数を落とした。実力のある演奏家例会(布施明・菅原洋一・白鳥映美子・森山良子・さとう宗幸・デュークエイセス・蘭田憲一とデキシーキングス・グレンミラーオーケストラ)が企画され成功を収める。その中でも布施明・森山良子は歌唱力の他抜群の話術で観客を魅了しさとう宗幸はバレンタインコンサートとして定着。合唱例会は労音創立以来の第九を引き続き取り組み、前年の「いのちの賛歌」続き今年度は、被爆45周年記念・被爆者援護法促進・反核平和を願ってカンタータ「人間を返せ」を全体で取り組み、他団体合唱団「白樺」の協力も得て、素晴らしい演奏会ではあったが、組織的には失敗だった。

夏の友好祭は、シベリアの旅と時期が重なり中止にした。スキー友好祭は160名が参加する中蔵王高原スキー場で開催された。翌年度招聘のウラルコサック民族アンサンブル招聘の代表団11名(木下明男団長)がソ連を訪問。

## 石岡市指定文化財（二十四）

兼平智恵子

・天からコロナ収束警告してほしい師の一周忌に  
・ハイポーズ 師 ムラサキの花の影に笑む

ウィズコロナという新しい生活様式をもとに各々が自衛の努力を続けているなか、若年層の軽症、無症状者の感染増加がとても悲しい。

感染防止をしながら経済回復のために一線で懸命に活躍なさりながら、両親、祖父母そして多くの皆さんへの感染を避けるためにも、常に感染しているのではと、検査の必要性の心掛けをもつて頂きたい。

国、県、市に望みます。有効なワクチン、治療薬がないままの現在、PCR検査は誰でも何時でもうけられ、重症者を出さない態勢をさらにさらに充実して欲しいと思います。

さて今回の石岡市指定文化財の紹介は奈良、平安時代この地で隆盛を誇っていた常陸国分僧寺、常陸国分尼寺の跡から発掘された瓦と土器の紹介です。

「語りかける 古代のいしおか」によりまずと「日本に初めて瓦葺きの建物があらわれたのは、蘇我氏によって建立された飛鳥寺である。造寺にともない百済から多くの技術者が招かれ、その中に四人の瓦師（瓦博士）がいた。『元興寺縁起』『日本書紀』によると、崇峻天皇元年（五八八）に法師、寺工、露盤師などとともに瓦師を渡来したとある。

飛鳥寺の建立により、大和（奈良）、山背（やましろ・京都府）など畿内に寺院の造営が相ついで行われ、大化元年（六四五）に孝徳天皇が造寺を勧める

詔を出したことにより、各地で造寺活動が栄えんになっていった。瓦葺きの建物は、このような初期寺院建築によって地方に広がり、新しい社会のおとずれを人々に悟らせたのである。」

### 常陸国分僧寺跡出土古瓦

総社一―二―一〇（石岡市ふるさと歴史館）

有形（考古資料）

昭和五三・八・二三指定

天平一三年（七四二）聖武天皇の詔により鎮護国家、無病息災を祈るため、国ごとに置かれた寺院である。

正式な名称は、金光明四天王護国之寺といい、金字金光明最勝王経一部を安置した七重塔を設け、常住の僧二〇名と、最勝王経一〇部を置き、寺院の財政は、封戸五〇戸、水田一〇町によってまかなわれた。

現在は常陸国分僧寺跡がある敷地内には、大正八年五月創建された浄瑠璃山東方院国分寺になっております。昭和五二年度の発掘調査により出土された瓦で、復弁一〇葉蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦二点、石岡市ふるさと歴史館に展示されております。

特に復弁十葉蓮華文軒丸瓦は平城京羅城門跡で発見された軒丸瓦と同系の文様であることが注目され、当時の政府が瓦工の派遣などを含む技術指導をしたことを物語っている、といわれています。

### 常陸国分尼寺跡出土古瓦

総社一―二―一〇（石岡市ふるさと歴史館）

有形（考古資料）

昭和五三・八・二三指定

### 常陸国分尼寺跡出土墨書土器

染谷一六四六（常陸風土記の丘）

有形（考古資料）

昭和五三・八・二三指定

国分尼寺も国分僧寺と共に同じ年代に国ごとに置かれた寺院である。法華滅罪之寺といい、常住の尼僧一〇名を置き、寺院の財政は、水田一〇町によってまかなわれた。

現在、国分尼寺跡は石岡市立府中小学校の裏側に位置し面積三〇、〇〇〇㎡で史跡公園として親しまれています。

昭和四四年からの発掘調査により出土された、現在石岡市ふるさと歴史館に展示されてあります瓦は単弁一八葉蓮華文軒丸瓦と単弁二〇葉蓮華文軒丸瓦、二点となります。

そして常陸風土記の丘園内、資料館に展示されてあります墨書土器は土師器といわれる素焼きの土器で、内面は黒色を呈している。国分尼寺の正式名称である「法華滅罪之寺」の「法華」の文字が克明に記されており、この地に尼寺が存在したことを物語る貴重な資料で、描かれている文字はかなり精美で、当時の高度な文字文化を彷彿とさせるものであると言えます。

付け加えます事、ご案内しました石岡市ふるさと歴史館に展示されている僧寺、尼寺いずれの瓦も平成二九年一〇月、国指定史跡になりました瓦塚窯跡で生産された瓦ということです。

参考資料 石岡の歴史と文化



## 故郷の湖・筑波の夕日を眺めよう(1)

伊東弓子

十二時のチャイムを聞いたのは、天王宮の手前“深壺”辺り、そこでKさん夫婦と会った。熱い一日の始まりだった。

平山の突端、急カーブ辺りに釣人が多い。声をかけると、

「鮒を釣りたいけどなかなかからない。鰯が取れる。よくとれるよ」とのこと。近くいた土地のNさんが「夕日が沈むのは、十八日だよ」当日は、カメラマンで一杯になるよ」と話してくれた。御蔵川岸”辺りまで 釣人の車は続いていた。自転車の家族連れの人達にも多く会った。この時期、遠くも行けずこういう形の楽しみ方をしているのかと、道際の水神さまに声をかけた。

柊塚が良く見える。大井戸の桜の木の下は釣人の休憩となっている。弁当を広げている人、居眠りしている人、K先輩たちの植えた桜の木陰は癒しの場となっている。木を傷めたり、塵など置いていけないでほしいと願って通り過ぎる。

沖洲に入ると堤防沿いに塵が多いのに気づいた。反面、台の山々の美しさが目に入る。通り過ぎてきた玉里地区では気がつかなかったが、特に椎の木、若葉の色がいい。“ほほえみの丘”で、一休みしたかったが、二三人いたのでやめた。朽ちた丸太の椅子も直してない。みなさん年老いたか。あの日熱っぽく語ってくれた一人ひとりを思ってしまった。蓮田が続くせいか臭う。陽は高い、湖の色は泥からの茶か、また緑色っぽさが波打っている。波も大きくはない。園部川から出た舟が、諍いを起したのもこの辺だったろう。この辺からも柊塚

は良く見える。田の苗が遅しく見える。玉里の方より早く植えたのかもしれない。

今回の取り組みのことを思いながら走り続けた。玉里御留川を自転車一周するのも今回くらいかな！しみじみ村の活動の一つ”ダイヤモンド筑波を見る会”が、ここ何年も続けてきたが、今年は、考えなければならぬ為、多勢を一ヶ所に集めるこの活動は中止にすることになったと聞いた。年の所為か夕方から夜にかけて、又若い人達の動きの中では就いていくのは苦痛になっていた。【この機会に故郷のよさを発見する】

私なりの、御留川地域とのつながりをもつ機会にしようという事で取り組んだ。五月十七日(日)の午後六時半頃、自分の家から、田や畑から、職場で、勤め帰りに、霞ヶ浦や川沿いの道で、古墳や森の上から意識して目に留める機会をつくってほしいと声をかけた。今迄、気がつかなかったことを感じてほしいと、願っての計画だった。今年の活動に相応しいと、自画自賛しての取り組みだった。陽は高く、空は青く、この分だと大丈夫かと期待に胸が膨らんだ。

高須で御留川一帯が目に入る。右は雨宮端亭の“美ち艸”に出てくる絵、左は浮島が目に入る。大橋を渡り田伏に入ったのは、出発より一時間半かかっていた。魚野川にて“海老の天麩羅定食”(地元の海老)を食べた。今日誘う筈だった孫のTたちに土産としてテイクアウトした物を持って午後二時半には田伏を出発した。陽は高く青い流れが二羽の白鳥との色彩もよく、野ばらの花も香りもついてきた。あと半分頑張らねば今日の楽しみが果たせない。

柏崎で又、泥色、緑っぽい水が一面を覆ってい

た。菖蒲の黄、クローバーの白を見ながら自然に口ずさんでいた。あの家、この店ゆつくりと訪ねたいが、またの機会にと諦めた。大きなカーブの所から大橋の方を眺めていると、波の音が凄い、波は北へ北へと急いで前の波を追う姿に不安も覚えた。この陽が筑波の峰に沈むまで続いてほしいと願いながら行く。苗の間に陽の光が長く道を作る。

あちこちから見えた柊塚が目の前に迫ってくる。安食だ。御留川もう一つの印、稲荷の森は見えるには見えるが見難くなった。まわりに木々が増えてきているからだろう。さわさわと木の葉が動き出した。

高賀津の地区を見ながら柊塚に行ってみた。随分と暫くぶりだ。広い田、畑の中を小型の古墳・柊塚は木々に囲まれ静かだ。遠い昔、この墳の元に波が寄せていたそう。堤防へ戻ると、とても風が冷たかった。波が強い。打ちつける波の色も泥色、それが大型の波に変わる。水飛沫も増えた。いやな予感がする。そんな中でも釣人は確りかまえている。「こんな風が強くて釣れますか」「釣れるよ」という。団子を作っている様子だ。(さつまいもと、何かを交ぜようだ)聞こえない。もう一つはめっかを固めて作ったものだというが、よく伝わってこない。不思議に思って「水の中で溶けないの」と聞くと「溶けるよ」と、淡々とした返事。「大丈夫ですか」と聞こうと思ったが言葉にはしなかった。風が変わって強い、波も酷い様子だ。

八木の堤防のカーブを曲がると、いよいよ石川、高崎、高浜の狭い入江へ入る。湾に向かう波は北西にゆつくり、小波になっていた。静かだ。田は

荒れ放題、延び放題、明治・大正・昭和の時代、資本を投じての思いや干拓造りに努力した人々の汗は何処へ。私の目には空しさが残っている様な姿だ。山崎の森沿いに続く田も農業を豊かにし、地域を豊かにしたのも束の間だったのか。江戸時代の渚にそった道も、奈良時代に高浜から月の台へ行った舟の道も、見る影もない。

右、玉里の方を見ると大将の三階建ての家が、ダントツ目に付く。台の木々の間から自然に溶け込んだ建物、予定では今日、「ダイヤモンド筑波」を見る筈の館が見える。あ、そろそろ集まる時間だったなあ・・・自負するわけではないが、やはり自負したい。こういう時だからこそ、自分たちで出来ることを、そういう意味からも今日は大きな意味がある。飛び上がる魚を何匹か見た。私の立っている右半分は水、紺黒、左半分は灰色、どこまで流れていくのだろう。直角といていい程の八木の堤防を曲がると別世界だった。

石川地区の堤防からは、前方に筑波の山、山の背景は水色、陽もはっきり姿を見せている。湖の色が変わったり、水の姿が変わったのは、風の呼んだ天気の変りようではないか。日没までこのままでいてほしい、と願う。時々薄い雲が山の上を行く。か細い稲の苗の中にきらきらの固まりが出来る。五時のサイレンがなる。

高浜への橋を渡る。このままいてね。と、山に陽に雲に願って急いで台の孫の所へ手土産を届け、急いで台を降りて堤防へ、まるで滑り降りるように走る。

堤防（恵比寿神社前）辺りで知り合い四人に会う。会のNさんも後から声をかけてくれた。「誰か、知り合いはいるかと思って大井戸まで行ってきた」

とのこと。時間が迫るにつれて雲がふえて、結局見えず仕舞いだった。待っていた日時が長かっただけに残念だったが、知ったことの喜びを伝えてくれた人、来年もおぼえておくわといってくれた人の言葉、Nさんからのキヤラメルに力をもらって帰った。その後、会った人の中で四五人の人が応援の声をしてくれた。その度に一緒に、あの日の、あの瞬間を語り合った。これが今回の大きな喜びだった。

次回 七月二十四、二十五日また見る機会があることを伝えていこう。また、どなたかに会えるだろう。

## 耳守神社

小林幸枝

私の友人から、「耳守神社に行きたいので案内してくれない、お願い！」と連絡ありました。

私は、「コロナ感染騒動が終息してから案内します」と約束をしました。

この耳守（みもり）神社は、地元では『みみつちよ様』と呼ばれています。耳の病に効能があるといわれている全国でも珍しい神社です。

耳守の名は、平安時代末期の平繁盛の孫娘 千代姫の耳の病気の伝説に由来しています。

耳守神社の他に「耳の病にご利益」のある神社はないようで、日本で耳の病に効能のあるだた一つの神社だそうです。民話「耳千代姫」の話があります。皆さんも興味がありましたら、是非、足を運んでみてください。

場所… 小玉美市栗又四ヶ 2051  
駐車場無し、ただし神社の正面にある空き地に数台駐車可。



詳しくには、次号に載入します。

## 〈父のこと 22〉

菊地孝夫

気が付けばいつの間にかこの風の会に入会してから、三年目に入っている。父のことに事寄せて、いろんなことを書き散らしてきたけれど、継続的に文章を書いていくという事は、いくつものことを気付かせてくれた。人と人との邂逅は時に面白く、時に有り難くない。若いころは、もしかして明日にもすごい出合いが待っているのではないかと夢のようなことを期待していた。

ほぼ毎日のように少しずつ文章を書き続けている。幾度か言われたことだけれど、言葉の意味などを調べて書くようにと。それは正しいことだと思うのだけれども、一方では、安易にスマホやパソコンなどで調べたりすると、すぐに簡単に答えが返ってくるが、そのどれもが正しいとは限らない。中には明らかに過ちがあり、指摘したけれども正されなかった。

この頃とくに思うのだけれども、歌人という人々は、限られた文字の中で、まわりの心象風景をまるで言葉遣いの職人といったらいいのか、そのもって生まれた才能を使つて、表現する言葉を使い倒す人種だと思う。同じ風景を見ている筈なのに・・・。

世界的に認知されてからでもすでに半年がたっているのに、まだ有効な予防薬や予防法が確立されていない。この厄介なウイルスに対しては、治療法もまだない。相手の正体もわからないから弱点もわからない。この難敵に対して勝利するとか言っているけれども、どうやら今のところすぐには勝てそうにもない。このコロナウイルスに対して恰も戦争をするかのような宣戦布告をしたが、勝つ方法が全くない。ではどうするか。勝てない相手に行き当たった時には、ひたすら逃げるしかない。高温多湿は嫌うはずなので、例えば屋久島あたりへ逃げるしかない。

あるいは岩手県では一人も感染者が見つからないようなので、その理由を解析するのも一つの方法かもしれない。岩手県だけがとりわけ人口密度が低いわけでもないの、そこには何らかのわ

けがあるはず。詳しく調べるのが急務だと思える。そのところは専門家に任せるしかない。ウイルスを絶滅させることはほぼ不可能なので、感染しても無症状の人も多くいるから、そのタイプの人口を増やしていくしかない。この辺がわたしのような素人が思いつく限界です。個人的には、ストレスをためないこと、体力をつけることぐらいしかできない。誰にも会わず生活することなど到底できないし、人に限らず動物にも感染するようなので、そうなれば、最近できたまだ生物のほとんどいない沖ノ島新島にでも行くしかなくなってしまう。

少しでも明るいことを書くこうとしたつもりなのにどうしてもコロナのこととか主題になってしまい内向きのものになってしまう。誰かと会ってもいつのまにかこの話題に終始してしまう。ソーシャルディスタンスとかで、向かい合つて話すときも2メートルほどの距離を取らないとダメらしい。皮肉なことに、観光地では客が減ったために、汚染されていた水質が元に戻り、青い海が見られるという。CO<sub>2</sub>の濃度も減ったかもしれない。この数か月の経済活動の低下や旅行などの移動に伴うガソリンの消費が減ったから、窒素酸化物の濃度も減ったと思われる。飛行機の便数も激減したので、ジェット機から大気中に排出される大量のNO<sub>x</sub>なども大幅に減った。

(ブルーインパルスの医療関係者への激励飛行という余計なことをしたのはNGだけでも。当事者として轟音とともに頭上を飛び去るジェット機に、感動するだろうか?)

これから夏に行われる夜間の天体観測は、以前の澄んだ空が期待できるかもしれない。

東京には、セカンド・インパクト(第二次流行)がやってきた。これからさらにサード・インパクト(第三次流行)もやってくることも覚悟しておかなければならない。何の根拠もなく、規制したり緩めたり。しまいには、何の有効な対策もしなかったしできなかったのにもかかわらず、感染者の少なさを自画自賛する始末。始めの頃、山なりの曲線を示して、このピークを少しでも下に下げよう、と盛んに言っていた。このピークが一回ではなく何度もやってくることを誰も言わなかった。通常幾度も、波状的に流行が繰り返されるというのに、専門家という人たちはなぜかそれには触れようとしなかった。日本の感染率や死者数が、アジア圏において実は最低の水準にあるというのに、なぜかどのメディアもそれを伝えようとはしない。まだ全国では数十人の規模で感染者が発生し続けている。都内の病院ではまだたらいまわしが続いている。

我田引水、牽強附会のオンパレードである。自分たちの主張に都合のいい数字だけを発表して、ごまかしているとおもえない。

コロナの感染が報じられてから4か月、その数か月前から既にその兆候は専門家の間では知られていたはずだ。

1、2メートルの距離を取ることがすすめられている。人と人の距離が離れる。実質的に、多人数で集まることも禁じられる。それをソーシャルディスタンス(社会的離隔?)というのだそう。

次々といままでつかわれてこなかった目新しい言葉が発せられている。自粛という言葉が力を持ち、つまらないパフォーマンスが連日取り上げられる。今度は自衛だという。

その意味は、行政（官）は打つ手がないから、これからは皆さんそれぞれ個別に対応してくれという事なのか。行政は自らの責任を放棄したという事なのか。残念なことに、言葉やパフォーマンスでウイルスを殺すことはできない。

抗ウイルス薬の開発にあたっては、最終段階での人体への直接投与による試験が欠かせない。時には囚人から希望者を募って試験投与が行われたりした。現在はどうなのだろうか。外国ではボランティアによる大量投与の試験が計画されているという事だ。結果がわかるのは、早くても数か月先になる。

ニュースを見ていたら、北京の冬季オリンピックのことを紹介していた。2022年に開催される予定だが、習近平主席の指示で、はっばがかけられたことらしい。中国でも日本と同様スポーツを利用して国の威信や民心の統一を図ろうとしている。香港の自由を縛ろうとして、反発を受け、一つの中国を目指そうとしているが、イギリスから返還されてからまだ20年ほど。社会体制の違う世界に住んでいた人たちを、習近平の独裁する国に組み込もうとしても無理が生じる。

世界中にマスク文化？が蔓延するかと思ったら、あつという間にみんなマスクを外して外出するようになった。日常生活では定着しないのだろう。

ただマスク生産の技術は向上したろうし、その性能もアップしたろう。今の時点で、マスク不足は解消に向かっている。最大の生産国の中国では、マスクバブルがはじけてしまったらしい。

北海道では賭けマージャンで逮捕者が出たという。いわゆる反社会的勢力（暴力団関係者）の人間が逮捕された。これは検察幹部の賭けマージャン事件と関連があるのだろうか。また、広島河合夫妻が逮捕された。現職の国会議員が夫婦でそろって逮捕されるとは前代未聞である。

検察あるいは司法の世界の面に出てこなかった悪い部分が露呈したともいえる。法律にのっとり正義を行う立場の人々が、違法行為を半ば公然と行っていたことにこの国の法治制度の欠陥が出たと言える。憲法改正などおこがましいという事です。

水泳の池江梨香子選手が、難病の白血病からかなり回復しているようで、病にめげず頑張っていると思っっています。



## 風と共に 《理》

大輪啓展

### 参 ことわり

梅雨の季節到来です。

新型コロナウイルス感染について、未だに日々新たな陽性者が出ています。

完全に無くなるまでは暫く掛かりそうです。一時の不安な状況が落ち着いたかのようにも見えますが、油断大敵です。注意する事を忘れずに新たな生活様式に取り組んでいきましょう。

今回のコロナ騒動では、大打撃を被った個人・企業等大勢の方々が大変な思いの中、それらを打開する為、あるいは被害を拡大させない為苦渋の決断を下さなければならぬ。

何とも言えない苦虫を噛み潰したような、そんな心地で新たな生活が少しずつではありますが、始まっています。

1人1人の行動・思考が特に試される1年となるのではないだろうか。

胸を張って誰の目を気にすることのないような、そんな1年に成れば良いなと感じております。

今回のテーマは、ことわり

私は常日頃から、理を意識して生活しています。と、冒頭に述べています。

ことわりとはいったい何なのか、日本国語大辞典では、次のように定義しています。

物事の筋道。不変の法則。ことわり。道理。また、

理屈。

それでは私がなぜ、常日頃から意識しているのか、

それは淀みない清流の様な流れの中、人生というアドベンチャーを楽しみながらクリアして行きたいからです。

そして物事には、原因・経過・結果。つまり、始まりから終わりがあります。

皆さんも少なからず、ことわりを無意識に考えの中に取り入れて生活しているはずです。

例えば、手に持っていたコップを何かの拍子で落としてしまう。そんなシーンを見たり体験した事はありませんか？

皆さんはそんな時どうしますか？

反射神経の良い人は、落ちる前にもう一度掴む事が出来るでしょう。

ただ、大半の人は「あつ」と言う間に、地面へと吸い込まれているのではないでしょう。

このような一連の出来事は、起こるべくして起きているのです。

原因、様々な事が考えられます。

1. 濡れた手で持っていた。

2. コップ以外にも複数個様々な物を持っていた

3. 手で持ったまま別の事をはじめた。

まだまだ原因となる事象は複数ありますが、今回のことわり（原因）については、皆さんの目にも明らかな事象がほとんどです。

これらを私の日常に取り入れてみるとすると、私はあらゆる要因を排除していきます。

そして、それを様々な事柄に繰り返し行います。

皆さんはどうでしょうか？

ただ、どうしても緩慢になっていくものです。

失敗から物事は学ばなければなりません、正しく心に焼き付けて行かなければ、或いは簡単だと意識を散漫にしてしまうと、中々その先のステップには登れません。

誰でもやってる、常にそんな事はできているなんて思っているあなた。

出来ていないと断言しましょう。

出来なかつた事が出来る様になると、さも当たり前の様に人を見下したり、その様な言動・行動を起こしがちですが、先ほど出来ていないと断言した方々はほぼしていると思います。

思いあがらず謙虚に、脳ある鷹は爪を隠す。

と言った具合でいた方がミステリアスで、良いのではないのでしょうか。

脱線してしまいましたが、

失敗から学ぶ事

得た知識を心に焼き付ける事

これによって、同じ失敗を減らす、そうする事で常に新しい事を頭の中に入れていく事が出来る。

そうやってみると、少し世界の景色も変化し、見えていなかった世界も経験出来るようになる。

そうしたら、謙虚に爪を隠しながら、また新たな世界観を見つけ出す。

ワクワクした毎日へと繋がりますね。

世の中には様々なパターンが存在します。

普遍的な事から特殊なことまで。

そのパターンの応用のノウハウで、世界は常に廻り続けている、そんな気がしてなりません。

様々なパターンはあれど、個人ではなく人との繋がりが・絆・愛。

その先の読めない様な展開が待ち受けている、そんなものも人生には大いに必要で有ると言わざるをえません。

日々感謝の気持ちを持って、心にゆとりのある生活を組立てる努力を怠らずしていききたいものです。

常に誰かに世話を焼かれたり、心配をかけてしまったり、さりげなく助けてくれたり、

自分では気が付かないところで、誰かがアナタの為にしているかもしれません。

そんなだれかに感謝の気持ちを持って言葉にしましょう、

今日もありがとう。

## 【風の談話室】

### 《読者投稿》

やさと暮らし (41)

さと女

関東地方も梅雨入りしました。我が家はぬか漬  
けでこの時期を乗り越えます。そして軒先にハチ  
の巣を発見？美しい家づくり、そつとしておき、  
ずつと眺めていたいがここは通り道、申し訳ない  
が移動してもらおう。

・この時期ならではの山椒の実、竹の師匠が、摘  
んでくれました。ピリツと辛く爽やかな香り。  
実の方はきれいにこしらえて、少々茹でて水にさ  
らし醬油漬けにして保存、葉っぱの方もちよつと  
茹でて、酒、みりん、味噌とすり鉢でペースト状  
にしました。炊きたてのご飯といっしょに食べる  
と、たまらない美味しさ。暫く楽しめます。

・昨年の春だったか？椎茸栽培用にと、師匠から  
頂いたナラの木、椎茸菌の駒を打ち、裏庭の日陰  
地に設置。先日何気なく目に入った、手の平大の  
椎茸2つ、そして今朝見事な椎茸、さつそくバタ  
ー炒め、満足感この上なし。オカトラノオ・・・  
あまりに小さな可愛い花のかたまりなので、そつ  
として置いたら裏庭に、いつの間にか群生してい  
た。

・心地よい風が簀え立つ並木の間を吹き抜けて行  
く。師匠と共にランチを頂き、友の庭を拝見して、  
花々を眺め、おしゃべりして、幸せな時間でした。

・イチゴ屋さんから、イチゴ苗の処分をするよ・・・  
ジャム作るなら採りにおいで、ということでも早速  
出かける。最後のイチゴ苗を処分し来年の準備を  
する。ハウスの中とはにかく暑い。時折外の風に  
吹かれながらのイチゴ摘み。今年はコロナの影響  
でバスツアーがキャンセルになったりして大変だ  
ったが、一息つく間もなく来年の準備。どうかコ  
ロナが収まってくれますように・・・お昼は久し  
ぶりの農家飯、みんなで頂くご飯は美味しいな  
あ・・・。

・梅の収穫時期になった。直売所に買いに行こう  
と思いつながら散歩していると、同級生にばったり。  
そこには大きな梅の木があり、梅の実がたくさん  
実っていた。凄いいねなんて話をしてっていると持っ  
て行っていいよと、早速梅狩り・・・。梅シロップ  
にして夏を乗り越えようと思う。

・今日は八郷庁舎の駐車場に車を置いて、恋瀬川  
下流に向かっの散策。田んぼも川沿いの土手も  
一面の緑。その緑の中、散策のなんと気持ちいい  
事。此の日は3キロほど歩く、続きは次回の楽し  
みに・・・。

・翌日は風土記の丘へ・・・散歩も3ヶ月ともな  
ると、時には違う空気も吸いたくなる。夕方少し  
涼しくなっから出かけた。毎年桜の時期に幾度  
となく行っているがその時は、桜見物しながら蓮  
池の周辺を歩く程度だったが、今日は奥の山の方  
へ足を運んだ。遊歩道が大分整備され所々ベンチ  
なども置かれ、何より小鳥さんたちの歓迎の歌が

すごかった。途中カメラを首にぶら下げた知人に  
も出会った。鳥の写真を撮りに来たと言っていた。  
アジサイも満開だった、この暑さでしんなりし  
ていた。アジサイにはやはり雨がにあってなあ・・・  
約4キロのウォーキングでした。

・ラッキョウの季節です。直売所でも早々に売れ  
てしまい、先日朝一番で行って買って来ました。  
根を切ったり薄皮を剥いたり瓶を熱湯消毒したり  
とほとんど一日仕事でした。甘酢漬けと塩漬け、  
仕上がった時はラッキョウを見てにんまり。食べ  
てくれる人の顔が浮かんだがコロナで、多分来な  
いだろう、なんて思うと、つまらない日々。庭に  
はエレガントな八重のホタルブクロ・・・優しく  
て可愛い！あまり増えない。

・オジサン遊び、コロナで遠出は出来ないし、  
夫はここ数週間、一日何度も池にかよっている。  
と、言っても家から30秒。いつもはタナゴ釣りの  
釣り人がいるのだが、近ごろは誰もいない。此の  
日も朝から仕掛けを作り4ヶ所に仕掛けていた。  
何度も見に行くのだが、成果はクチボソ12匹、ブ  
ルーギル数匹、めだかのようなもの多数、それら  
を古い風呂桶に入れてある。近所の方から水草を  
沢山頂く。仕掛けの網も日々進化しているよう  
ですが、果たしてタナゴは網にはいるのでしょうか・・・。

・毎日の池通いで、ついにタナゴが掛かった。姿  
は、ちよつと赤が入っていて綺麗、その他名前の  
分からない魚も10数匹入っていた。今回の仕掛け  
がよかったのかな？早速水槽を買ってこよう・・・。

・F Bにアップすると、友人から水槽あるよと連絡が来る。友人のテラスにはメダカの水槽がいくつも並び、しばし、メダカの話で盛り上がり、飼育方法等教わり……。水槽、水草、タニシなど沢山分けて貰う。家に帰り、早速、砂利や諸々の水槽に入れるポンプなら、色々買って来た。明日が楽しみです。

・友人に頂いた水槽に魚を種類別に分けた。水槽の底に砂利などを敷きエアの装置をして、忽ち5つ頂いた水槽がいっぱいになった。ブルーギルなどは今まで通り、風呂桶の中に。その友人方に仕掛けの餌のヒント(ドッグフード)を貰い実践したらたくさんのタナゴが、一日釣り竿を垂らしたの釣り人がこれを見たら、たぶん恨まれるだろうな。幸いコロナのせいか釣り人は誰もいない。

・風の会の白井先生が亡くなって1年。今日は会の皆さんで先生のお墓参りをした。墓周りの草を抜きながら、元気な時、暇になったら釣りでもしよう、なんて、夫に言っていたことなど思い出しながら、手をあわせた。



## 隔離？

燕石山人

そろそろ夏本番。その前に梅雨がある。6月12日関東地方は、ほぼ例年通りの梅雨入りとなった。その合間の晴れた日には蒸し暑さが続いている。

石岡のお祭りも、新型コロナのためにとうとう来年に延期となってしまった。10月に予定されていたかごしま国体も中止が発表された。そんななかにあっても、まだ性懲りもなくオリンピックやパラリンピックがどうのと言っている困った人たちがいる。当人たちは、利害が絡んでいるので退くに引けなくなっている。

パラリンピックを開催することによって、障害者に対する人々の視線が良い方に向かうことには反対しているわけではない。障害者がより広く社会で活動できる世界が望ましいと思うからです。その一方で、政治的に利用しようとするもの、あこぎに金を巻き上げようとするものが後を絶たないのが現状だと認識している。

本来、スポーツというものは、競技者個人の榮譽に属するもののを、国の威信をかけたものに落とし込んでいくから東宝としては好きになれない。競技者の側も国の威信を背負ったようなことを平気で口にするものがある。天邪鬼な性格の筆者にしてみれば「なんだこりゃあ、」と思うのみです。

実現不可能と思われるオリンピックをどうしてもやりたいのなら、いっそのことネット空間上でバーチャル対戦のバトルゲームでもやったらどう

だろうか。参加は各国の首脳がいい。金正恩とトランプと習近平、プーチンの四つ巴のバトルとかが面白いのじゃあないか。

(だいたい不真面目なことを書いている。)

ようやく、日本国内の実際の感染者数が、公式発表の数倍に上ることをしるし認めた。これまで中韓の発表する数字が少なくて信用できないと批判していたが、その足元がこれだからがつかりする。公式発表の10倍はいると思っている。そうでなくてもこれぐらいの予測に立って対策を考えるのが危機管理の常道だろう。

韓国では。慰安婦問題の推進団体の一つに経理不正疑惑が持ち上がった。幹部が寄付金を着服したという。親族が北朝鮮のスパイ御容疑で逮捕されている。こうした団体幹部の不正は、これが初めてではなく、これに類したことは日本でもしばしば起こっていることであって、珍しくはない。

韓国を嫌っている勢力はこの時とばかり、非難ごうごうである。まして金正恩政権が南北朝鮮の対話会館を爆破して壊してしまった映像が流れた。休戦協定も破棄をほめかしている。トランプ政権に対するブラフだとは思っただけね。

小池都知事は、会見で「東京アラート宣言」というのを出したが、早速終わりにして、規制解除に向かう。なんのために都庁やレインボウブリッジをライトアップしたのかさっぱりわからない。マスコミむけに大阪のサル真似をしただけのことだろうか、それとも都知事選の為のパフォーマンスだろうか。カイロ大学卒業も、学歴詐称の疑い

が出てきている。アラームが鳴っているのはご当人の方。

アラートを解除した途端感染者が増えた。自粛宣言も、ロックダウンも効果はない。

コロナに対する具体的な対策がなんにもできないものだから、こうしたごまかし、まやかしをしてみんなをだましているだけにすぎない。

今回のコロナ禍は世界規模だから、この機会を、世界共有のものとして、紛争を一時棚上げして協力し合えないものだろうか。当然この企てに、ポピュリストたちは排除しなければならない。彼らは自国あるいは自分たちの集団の利益しか考えていないから。世界の先進国のほとんどが規制解除に向かって走り出してしまった。経済活動の停滞低下を恐れていること。

先般問題視されていた、2カ所の地王配備型イージスシステムの導入が保留となった。一方では北朝鮮が韓国との話し合いの場所を爆破解体撤去し、休戦状態をやめるという。金正恩のブラフかとも取れる。韓国内は慰安婦支援団体のスキャンダルで政権も揺れている。これに対する方策かとも取れる。一連のコロナ禍の影響で、北朝鮮も国内経済に大打撃を受けている筈であり、必然的に南北の軍事的緊張が高まっている。北朝鮮国内でも感染者が発生していないわけがないのだから。表向きは影響ないと虚勢を張っているが、そんなわけがない。日本も対岸の火事というわけにもいかない。

日本も3・6月の4半期のGDPがマイナス2、3パーセントになったらしい。戦後最悪の落ち込みだというが、原因をコロナ関連としているが、消費税の増税も主原因だと思う。景気浮揚策の予算が可決されたが、それによって次の4半期のGDPがプラス見通しになるとは思えない。実際にはほとんど効果がなく、マイナスかせいぜいイーブンだろう。いつものことだけれど、見通しが甘すぎる。いつも後になって下方修正を発表していて、縷々がっかりさせられるのです。

ネット上の目に余るヘイトスピーチに対しては問題提起がなされた。これを法的に排除したり規制したりすることは慎重に行われなければならない。にもかかわらず、ろくに審議もせず、今国会で可決してしまった。安易に法律を作れば、個人情報保護法のように官庁の都合の悪い情報を墨塗りで消してしまうようなことだけに使われてしまう。

マイナンバーの普及と、セットで個人レベルのあらゆる情報を国が監視し、操作する、いやな流れである。やめてくれよ。

## 人類発祥の地

打田昇三

古過ぎる話だが、アフリカ大陸の東北部から南西部にかけて斜めに貫通する大地溝帯が「人類発祥の地」と言われているようで、今から凡そ百万年以上前に其の辺りに居た猿らしい動物が進化して各地へ出稼ぎに行き、それぞれの地域に定着して固有の民族となったのであろうか？其の証しと

なる四百四十万年程前の猿人化石が一九九三年にエチオピアで発見され、首都アジスアベバのエチオピア教会大聖堂付属博物館に保存されている。此の教会は古代エジプトなどで信仰されたコプト教の教会であったが、いつの頃からセントジョージと言うカトリックの聖職者が住み付いて改宗したらしい。宗教は思い込みが原点であるから個人の都合で改宗すべきでは無い…とは思うが。

エチオピア人と言えばマラソン競技を裸足で走ったアベベ選手が知られており、その所為かエチオピアの人は裸足で暮らしていると誤解され易いが最低限でもサンダル履きである。本来、「エチオピア」とは「陽に焼けた顔」という意味とか、暑い土地なので日焼けは仕方が無いがヨーロッパ系民族であるから端正な顔立ちをしている。

国家としてのエチオピアは有名なシバの女王とソロモン王の子であるメネリク一世が創始したのだとか、其れを象徴する様にエチオピアの民族舞踊は「猛獣のたてがみ」の様な鬘を付けて踊る。是が「シバの女王王国」のシンボルらしい。此の伴奏をするバンドの中に日本の三味線に良く似た弦楽器が見られたのである。伝統的な音楽であるから向こうの方が遥かに古いのかも知れない。

日本人も遠い昔にアフリカ大陸から渡って来た…と思えば、暑いとか寒いとか不平は言えない。

## 茨城県の難読地名とその由来 (4)

木村進

### 天下野【けがの】 常陸太田市

「角川日本地名大辞典」によると、当地の獅子舞が徳川光圀に「天下」と賞されたことから、江戸での興行で「天下」の標旗を掲げていたが、將軍に天下一の呼称は身分を越えたものといわれ、光圀が「天下野村で一番の意である」と弁明したとのことにより、この村を天下野と称するようになったと伝えられている。また当地名は大阪の天下茶屋、美濃の天下原とともに日本の三地名の一つという（水府村史）とも書かれています。

また、水府村史によると、元禄12年（1699年）に常陸国久慈郡の下高倉村が改称されて「天下野村（けがのむら）」となったと記されています。徳川光圀が亡くなったのは1701年ですからその少し前です。江戸期には「天下野村」「上高倉村」「下高倉村」の三村があり、明治22年に三村が合併して「天下野村」となりましたが、明治29年には再び天下野村と高倉村（旧上と下の両方が一体となった領域）に分離し、昭和31年にまとまって「水府村」になっています。

この天下野村（けがのむら）の領域は常陸太田市の北部山間の地域で、常陸大宮市との県境にある阿武隈山系の麓の領域です。

天下」と賞されたという獅子舞は地元の説明では「散々楽」（ささら）だといいます。ささら舞は獅子（鹿）の姿をした被り物を被って踊るものが東北地方では知られています。茨城県は主に「棒ささら」が多いようです。三匹のささら（棒に獅子の人形を取り付けたもの）を下から人が操作して踊ります。ささら舞を「散々楽」と書くのは、水戸の台渡里あたりのささらを呼んでいるようですが、この天下野のささらが今でも行われているのかどうかわかりませんでした。

この地を天下野と書くという前には恐らく別な漢字で「けがの」と呼ばれた地域がこのあたりにあったと考えられ、それを探るために「けがの」という地名を探すと、「歌山県橋本市慶賀野（けがの）」がありました。

この橋本市の慶賀野という場所は、大阪から高野山に向かう参拝道である「高野街道（こうやかいどう）」沿いにある町で、大阪府側から和歌山県側に入るときに「紀見峠（標高300m）」を越えて、下った麓にある町です。高野山にはそこから橋本市の街中を通ってまた山に登ります。地形を見ていると常陸太田市の天下野と少し似ているように思われます。

意味合いはよくわかりませんがこちらの天下野もその昔は「慶賀野」または何か別な漢字で書かれていたのかもしれませんが。

また、「毛野、毛ヶ野」または「穢野」なんて漢字で書かれていたのかもしれませんが。

### 先後【まつのち】 小美玉市

この先後は、現在の登録されている住所表記では「まつのち」となっていますが、地元では昔から「まずのち」と呼ばれています。

また、「角川日本地名大辞典」には、地名の読みとして「まずのち」を採用しています。平成の市町村合併前の美野里町の頃は「まずのち」と呼ばれていたようです。

地名の由来について、この地名大辞典では、（1）伏見（京都府）・松崎（千葉県）と当村の3稲荷が京にのぼり位階を受ける時、伏見が最

初に受け、そのあと当村の稲荷に勧めたところ、松崎を推し、私は「まずあとにしよう」といったので先後とした。

（2）松崎稲荷の分霊を祀ったので「マツザキ」に対して「マツノチ」とした。

などの伝承がある（美野里町史編集資料）と書かれています。

伏見稲荷は有名ですので別格として、もう一つの松崎神社ですが、この神社は千葉県香取郡多古町にある坂上田村麻呂が蝦夷征伐に出かけるよりも前の西暦722年創建が伝えられる古い神社で、「坂東稲荷本宮」などとも称していた神社です。この（1）の話は地元の神社などに掲げられた地名由来の話とほぼ同じです。

伏見稲荷と、松崎神社の2社を同列でこの神社の位を論じるのは少し不適切に感じます。

このため、上記の説では（2）の方が可能性は高いかも知れません。

そうすれば「まず」ではなく「松ノまつ」というのが正式名称というのはわかります。

さて、この場所は小美玉市（旧美野里町）の6号国道が隣の茨城町に入るすぐ手前の低地で、巴川上流左岸にあります。まわりは田んぼが広がっており、先後新田と呼ばれています。江戸後期の天保年間までは「前後新田」と記載されています。

また先後稲荷（まつのちいなり）は徳川光圀が、西郷地村（すぐ東となり）の刺賀飛護念（ひがひこね）の社（現石船神社）に合祀されたといわれます。（県神社誌）

全国に「先後」という同じ地名は見つかりませ

んでしたが、「前後（ぜんご）」という地名はありませんでした。

愛知県豊明市前後（ぜんご）これは名鉄名古屋線の駅名にも成っています。

この地名「前後」の由来としては

（1）昔、桶狭間の戦い（1560年）で織田信長が今川義元を破った時、この戦いで亡くなった兵士たちの首を「前後」に並べたところからつけられたとの伝承からついたという説。

（2）「前後村」という名前は、明治になってからつけられた名前です、それまでは「五軒家新田村」と言われていました。その「五軒家新田」という名前も、その前をさかのぼると、江戸時代初期には「間米（まごめ）村」といわれ、中心となる「本郷」のほかに、17世紀に「五軒家」、「八ツ屋」、「三ツ谷」という3つの集落ができました。これらの集落が本郷の南にあるため、「前郷（ぜんごう）」と呼ばれたのが、「前後」に変わったものという説。

（3）桶狭間の名前は、このあたりの地形が狭い谷が迫っているために付いた地名で、この狭い所を意味する「せこ（狭処）」が変化して、「せんこ」になり、それが「ぜんご（前後）」に変わったものとの説。 などがあります。

## 手子生【てごまる】 つくば市

地元の説明では、地元にある鹿島神社が名前の由来に係り、

「この手子生鹿島神社は創建不詳だが、1603年に手子生城主・菅谷範政が祭神不詳だったため、武甕槌神を祀ったとされる。」とあり、地元では、手の子明神として親しまれており、御神体は木彫

りの手首です。

伝承では、その昔、手子生村に住んでいた若い夫婦が、夫の留守中、その妻が村の若い衆のいたずらに遭わないように、夫婦の隣に住む爺さんが、毎晩妻の身体に手を当てる守り神として、いつしか妻は妊娠し、そのとき生まれた男の子は稀に見る秀才で、成人して立派な功績を残したことから、後世その徳を慕って一社を建立して末代までの守り神としたという。「手を当てる子が生まれた」ことから手子神社と呼ばれた。 とある。

しかしこれはこの「手子生」の漢字から後から作られた話である可能性が高い。

なぜなら、手子后神社という名前の神社は各地にあり、このような話は伝わっていない。

まず、神栖市波崎には、手子后（てごさき）神社は、常陸国風土記に記載のある「童子女の松原伝説」に登場する。海上の安是（あぜ）の嬢子（いらつめ）＝手子比売命（てごひめのみこと）を祀っています。

この手子后神社という名前の神社は、この地のほかに茨城県には石岡市中津川、水戸市元石川町、水戸市田島町、城里町上坪にあります。

やはりこの地名の元となっているのが、手子后神社の「手子比売命（てごひめのみこと）」が関係ありそうだ。この神様は一説では鹿島神宮の神の娘とも言われています。

「鹿島神宮伝記」によると・・・「本社（たつみ）に当り、天宮社あり、手子后と申し、大明神の女と申す。天降る神の乙女は世にもまた、雲の通い路行（ゆき）返らむ」とある。

すなわち、「海上（うなかみ）の安是（あぜ）の嬢（いらつめ）」＝「手子后」＝「天宮」となる。

この神をたどると、日本に渡来した倭人のルーツであり、中国華南の「海上（うなかみ）の安是（あぜ）の嬢（いらつめ）」である「娘馬（ノーマ）神」に行き着くという。

こんな話が元になっているとすると鹿島の神のルーツもわかってくるかもしれません。

## 常陸旧地考

菊地孝夫

（始めに）

自分の家のルーツを調べているときに、偶然常陸旧地考という本と出合った。

明治初期に書かれたもので、和綴じの筆書きのものである。その復刻本で、漢文交じりの文語体で、何より崩し字と変体仮名のオンパレードで、正直幾度か投げ出しそうになった。旧漢字は知っているつもりでしたが、江戸期の漢字の使い方は独特なものがあつた、まるで暗号を解くような感じがしました。何とか読み終えて、此度この会報に載せることとしました。

素人仕事なので十分とは言えませんが少しでも何かの役に立つたらしと思っています。

（お断り）

底本としたのは、崙書房の復刻本です。付録の柳生四郎氏の紹介分は割愛しました。

- 1、〔一〕内は鬼澤大海の原注です。
- 2、また個々の地名などには、大海自身がフリガナを振っています。
- 3、必要に応じて（一）で字句を補足しました。
- 4、適宜、句読点も加えました。
- 5、難読漢字には、ルビを振りました。大海自身はルビを振ったものもあります。
- 6、また読みやすくするために、改行も行いました。
- 7、明らかに誤りとおもわれるものは、直しました。
- 8、個々に注記すると煩雑になるため、特に断りは入れていません。
- 9、原文の香味を残すため、あえて旧漢字のままにしたものもあります。
- 10、鬼澤大海自身も本文中で述べていますが、にわか仕込みの身としては、読者諸賢の御指摘を伏してお願いします。
- 11、巻末に参考とした文献を載せました。

## 序

衣手の常陸の国は、東路の道の果てにして、  
 霰降る鹿島の海は、喧しく海上かたに免くらしい  
 て、これより此の地には島という島もなく、国と  
 という国も聞えず、東の真空の限り、天雲の向き  
 伏し極み、遙々に浪たちわたり、限りなき大海の  
 原にて、ここにまことの国の極みなりける。此の  
 国東はすべて大海にして、みちのく舟行き交い、

南はおおよそ利根川を限り、下総の国となった。  
 西は下野奴の国の山々に連なり、北は道の奥にと  
 なれり。風土記に、いわゆる往來の道路、海河の  
 渡りを隔てず、道の八街、ひた道に道行く国々な  
 りけり。和名鈔に云う、管十一所謂、新治、真壁、  
 筑波、河内、信太、茨城、行方、鹿嶋、那珂、久  
 慈、多賀これ也。のち、西那珂、西河内の二郡を  
 置きて十三郡とす。

元禄十五壬午年（1702）の国図を見るに、

この二郡、真壁郡の南北に属り。西河内はまた真  
 壁の南に連なつて、元は一つの郡に見える。西那  
 珂は、真壁の北に在れど、新治茨城二郡の間に入  
 つて、二郡のうちどちらだろうか。とつ郡によれ  
 ば、茨城の末を分ちたるべく思われる。さて、那  
 珂はウバラキを隔てて久慈となれり。常陸國誌  
 にこの二郡を載せて言う、

「右二郡は、世に伝わる常陸の郡図にこれを載  
 せたる古書なく、旧郡には非ざる明しなり」  
 云々と見える。この書は世に西山公の御饌撰なり  
 と云い伝えたり。今また西河内は、真壁に入り、  
 西那珂は茨城に加われりと。これ即ちもとのかた  
 ちに還ることになる。多賀・久慈・那珂・茨城・  
 鹿嶋の五郡、東の荒海を受けたるが中に、鹿嶋郡  
 だけ茨城を根として、長く東南に秀でて、刀禰の  
 下つ方の入海に包まれている。また行方郡は、鹿  
 島に沿つて入海の中に突き出ている。鹿嶋と行方  
 の間を北浦と言ひ、霞、なさかの二浦は、東は行  
 方、西は茨城、新治、信太、河内の四郡にわたつ  
 ている。茨城新治の方に入つてなさかの浦と言ひ、

信太河内わたつて広く霞の浦という。

古事記、日本紀、万葉集、風土記、和名鈔など  
 に出てくる所の名は、年月の移りゆくに従ひ、或  
 いは形を変え、或いは知る人の絶えて行くこと  
 を憂いて、古い書物によって、明らかにする。

この常陸者に在つては、筑波山のように高く、  
 彼方沖の海のように深く、霞の浦のおぼろげに、  
 信太の浮嶋の言い伝え、ただ北にあらず、おもし  
 るく、いとしことだ。

源 園雄 記す

## 常陸旧地考 上巻

常陸國 鬼澤仁左衛門 平大海 撰

## 常陸國

和名類聚抄に、常陸國は「國府は茨城郡にあつて  
 道のり 上り三十日、下り十五日」管理すること十  
 一（の郡）田四万九千二百六反十二歩 正公 各五  
 十万束 本稻百七十九万六千束、雜稻七十九万六  
 千束」と云う。延喜式に、東海道の常陸國は大を為  
 す、云々と云う。

職原鈔、東海道の条に、常陸國は「大なり、太守あ  
 り」と云う。又、諸國の条に、親王を太守とした。親  
 王を任ずるとき（親王は）吏務を知らざるゆえ、実  
 務を執り行う「介」を任命して「守」となした、云々  
 と云う。

百寮訓要鈔に、上総、常陸、上野の三国を守る太守  
 にはみな親王を当てて他の人を任ずることはなか

つた、云々。

(常陸國)風土記に、国郡の旧事を問う、古老が(それに)答えて、

さか

あつまのくに

「昔は相模國岳坂より東は諸県すべて我姫國と言つた。その昔、常陸とは言わず、ただ、新治、筑波、茨城、那賀、久慈、多珂の國と言つた。それぞれ官吏を遣わし、検校に任じた。その後、難波長柄豊前の大宮に 臨 軒 天皇の世に至つて、高向臣、

あめのしたしとし

みよ

たかむくのおみ

はたおりた

むらしら

さか

ひがし

中臣の幡織田の連等を遣わして、坂より東の

くに

あつま

國を治めさせた。その時、我媛の道を分けて八つの國と爲した。常陸國はその一つなり。そう名付けた

ゆきき

訳は、往來の道路、海河の渡りを隔てず、郡郷の堺

山河の峯谷が続いているので、近き道の心を取り、以て名とした。」と云う。

或いは、「倭武天皇、東夷の國を狩り巡り、新治の

くに

ひならすのみこ

県にきた時に、比奈良須命は新たに井戸を掘らせた。泉は清く澄んで、結構なことだった。時に興をとどめて水をすくい手を洗つた時に、衣の袖が泉に垂れて濡れた。衣の袖を浸したという意味で、この國の名とした。國の人の言い伝えに、「筑波の丘に黒雲かかる、衣手浸しの國これなり」と云う。

ひたち

みやこ

古事記伝には、常陸の中ツ國の造の条に、常道は常陸なりと云う。

万葉二十(卷)に比多知、和名鈔に常陸、(比太知)。

比太に常の字を書くのは、万葉十八(卷)に「等

の たち は な ひ た て り

能乃多知波奈比多底里にして、とあるのは、変わらず常に照るのを、比と言ひ、この意味なり。また十

ひたち

三(卷)に常土とも書かれている。今の本では常を當に誤っている。さて知に陸の字を書くのは陸奥の陸と同じく、陸道の意味なり、云々。

契沖が、「ひたみち」なりというのはまことに然り。

古歌に、東道のみちのはてなる常陸、と詠んでいるのは東海道の極みだから、云々。

齋藤彦麻呂の「諸国名義考」には、古事記に古今類註には常陸は「ひたかち」なりといっているのを、契沖が陸をかちと読んでゐる事いまだ知らず、云々と云う。

「釈日本記」に引用している風土記には、筑波と茨城の七百戸を分け、信太郡を置く、この地は元は高見國なり、云々。神名帳に、陸奥(國)桃生郡に日高見神社有り。

立入信友の説には、日高は「景行紀」について考えると、今の蝦夷地のことで、常陸はかの日高に通う道だから、日高道であらうと言つ。これを思えば、顯昭の説も捨てがたい、云々。いま考察すると、信友の「日高道の説」には淡路などの例もあるけれど、蝦夷は直に常陸に続いている地ではない。陸奥を隔てて遙かに離れていて、日高道とは言えない。なお、契沖法師の、ひたみちの説は宜しい。風土記では、往來道路、海河津濟を隔てず、云々といっているのは、古事になつてゐる。「衣袖漬し國」、は取るにも足らぬ浮説なり。

和名鈔・和名類聚鈔

風土記・常陸國風土記

坂・神奈川県足柄地方

臨軒天皇・孝德天皇(在位645~654)

検校・当時の官職名、また官吏一般をさす神

名帳・延喜式神名帳

## ○郡

倭名類聚抄に、常陸國は十一を管理する。新治「尔比波里」真壁「万加倍」筑波「豆久波」河内「甲知」信太「志多」茨城「宇波良岐国府」行方「奈女加多」鹿島「加之万」那珂 久慈 多珂、云々と云う。延喜式に、東海道常陸國は大を爲す。新治、筑波、河内、信太、茨城、行方、鹿島、那珂、久慈、多珂、を司る。遠ツ國を爲す、云々と云う。類聚、國史に、昔難波朝廷は始めに諸々の郡を置く、云々と云う。日本紀、成務紀五年の条に言ふ。山川を隔て、國縣を分け、阡佰を随わせ、以て邑里を定め、云々延喜式、和名鈔などに載せてゐる所の十一郡、今なお在る所なり。さてまた常陸國誌に、西那珂、西河内、笠間、藪木、秋津、関の六郡を載せてゐる。この六郡は廢れ、今の世には跡すらわからず。なおその条のところにてのべる。

成務紀五年・西暦年は不明

阡佰・道路の事、一説には田の事

國史・常陸國史

(続く)

## 【特別企画】

### 打田昇三の将門記 「罪と名声」(六一)

帝国主義に起因する第二次世界大戦の反省を含め現代日本は「平和国家」を標榜しているので他国を侵略することは無く、借金が多いが国力も資源も、過剰な軍勢力も野望も無いと思う。しかし同じ敗戦国でもドイツの場合は周りが異国に囲まれているから国民の意識が日本とは違うらしい。

私の現役時代に、実家が大地主、海軍の軍歴があり、米留学が長く世界各国に友人を持つという上司が居られて、ドイツへ行ったときに見知らぬ御婦人から「日本とドイツで協力し、世界の強国になりましょう」と声を掛けられたらしい。其の上司は早逝されたけれども、御息が御父君の遺志を継ぐ形でイージス艦の艦長など国防の第一線で活躍されていることをテレビで知った。

イージス艦とかミサイルとか近代の戦争は保有する兵器に左右されると思うが、合戦の形態が弓や太刀に頼っていた平将門の時代は、率いる兵力の数(野戦力)が勝敗の鍵を握っていたらしい。

其れ迄の合戦では、大軍とは言えない将門軍が勝利を収めることが多かった。その原因は「敵側の準備不足」に有ったような気がする。言い換えれば周辺諸国では平将門の武力蜂起に対応する態勢が整わず、また中央政府も平将門の蜂起を国家に対する反逆と認識して諸国の豪族たちに「何とかしろ!」と無責任な命令を出すのが遅かったのであろう。命令だけ出されても困るのだが:

今回は「秀郷の登場」に始まる。藤原を名乗るから一族であろうが全く無名の人物である。一般

には「俵(たわら) 藤太」と呼ばれており、百足(むかで) 退治の伝説がある。平将門も百足並みにされてしまったから良いことは無い。

#### ○秀郷の登場

敵である平貞盛らの消息を追い掛けて常陸国の北端まで軍勢を率いて出かけたけれども僅かに貞盛の家族しか捕えられなかった将門軍は、其れ以後も敵の情報を得られず、虚しく下総国へ引き揚げてきた。もし将門が姦計に長けた武将であったならば、釈放した貞盛らの妻子の行方を密かに追尾すれば貞盛の居場所も突き止められたと思うのだが其れもしなかった。原文には「多日を歴(ふ)と言えども、件(くだん)の敵を聆(き)く事なし」とある。敵は巧妙に隠れていたのである。

余計なことだが、将門軍が捕らえた貞盛の妻という女性は、将門と伯父の国香とが不仲になる原因となった女性(源護の娘?)である:とする説も存在するらしい。昨日今日のことで無いから真相は分からない。其の後に、多分、年末年始休暇だと思うが将門は近辺諸国から馳せ参じていた兵士たちを帰省させていた。しかし戦時体制なので大日本帝国時代の様に「月火水木金」と土日休日無しで備えているべきであった:

将門の館周辺に残っていたのは、帰る故郷が無いか金が無いかで、家にも行け無い兵士が千人にも足りない程であった。それも正月なので宿舎にゴロゴロしているほかは無い。長閑(のどか)な光景ではあるが、密かに偵察していた敵のスパイには全くの無防備に見える。其の情報に速やかに

敵将である平貞盛の陣営に伝えられた。

此処で表題の「秀郷」が出てくるのだが、原本では「押領使(おしりょうし)」という肩書が付いている。最近では会社の金などを横領する悪人が多いけれども、此の職務は諸国国司が郡司に任命された豪族の中から武芸に長じた者が選ばれるので警察権を持っていた。問題なのは此の藤原秀郷も一時は警察に追われる立場にあったらしいことで当時の政府は、危険な賭けだが苦しい紛れに悪人退治に悪人を利用していただけと思われる。

藤原秀郷のほうでも最初は将門側に就くか又は討伐軍に加わるかの去就に迷っていたのかも知れないが其の辺りは将門記に記されていない。あれこれと損得を計算した結果、藤原秀郷は平貞盛に味方することとなり、両軍合わせて四千余の兵を動員することが出来たのである。敵は開店休業中であるから是で十分に勝てる。大軍は将門本拠地に向かって堂々と進撃を開始した。

一方、天皇(みかど)取りでノンビリとしていた平将門は此の急報に接して驚いた。天慶三年(九四〇)二月一日に、取り敢えず手勢を率いて敵地に相当する下野国(栃木県)方面に出動したのである。

しかし敵の所在など詳しい情報は分らない。そこで副将軍格・藤原玄茂の武将である多治経明と坂上遂高(さかのうえのかつたか)両軍の後詰め(後陣兵力)を前方に出して偵察をさせた。命じられた斥候兵たちは近くの高い山に登り、周辺を見回したところ遙か北の方向に其れらしき軍勢が居るのを見つけた。それも凡そ四千人は居るであろうと思われる大軍勢である。偵察に出た兵らは直ぐに其のことを多治経明に報告をした。

順序と言うか、指揮系統の原則からすれば其の

情報は平将門の本陣に急報されるべきなのだが、合戦に臨んだ者は功に逸る。此の場合も多治経明は「一騎当千の武士」と言う大看板を背負っているから敵を前にして戦功のチャンス逃さない。報告は大手柄を立ててからすることにして藤原秀郷の陣営に攻撃を掛けたのである。

此の場合「一騎当千」が実行出来れば攻撃軍も四人で済む訳だが世の中は理屈通りにいかない。大軍の中に突入した多治経明らと言うか藤原玄茂軍の兵は忽ちに老獪な秀郷軍に撃破されてしまい、見知らぬ山野を逃げ惑うことになってしまった。当然ながら多くの者が討たれ、逃げ延びた生存者は極めて少なかったのである。此の悲報は程無く将門本隊に伝わったが、対策を講じる間もなく敵の大軍が目前に迫って来た。それも本来の敵である平貞盛の軍勢では無く藤原秀郷という新手の敵であるから、将門軍は取り敢えず兵を退いて状況を分析し、態勢を立て直す他は無い。

### ○川口村の戦い

「川口」と言えば埼玉県の大都市であるから其処で戦いが繰り広げられたのかと思っただが違いうようで、是は茨城県下妻市と古河市との中間辺り而も平将門の本拠地である岩井にも近い下総国川口村らしい。現在で言うところの筑波・古河線で三和辺りになるであろう。下野国へ遠征して行った将門は藤原秀郷と言う新手の敵に追われて本拠地の岩井を目前にした所まで退いて来たことになる。原本には、貞盛と秀郷の軍勢が退却する将門軍に付いていった、と書いてあるけれども、

借金取りと敵軍に付いて来られるのは追撃されるのと同じことで避ける余裕は無いが、気を取り直した将門は其処で態勢を立て直し、午後三時頃には反撃に転じた。当然のことながら将門が陣頭に立って勇猛果敢に戦ったので、其処まで追って来た貞盛は劣勢になり、思わず愚痴まじりで次の様に兵たちを激励する他は無かった。

「敵である将門の軍勢は雲上で鳴り響く雷のようにに勢が強く、政府軍である我が兵は蛆虫のように元気が無い…然し乍ら、賊軍の彼らには依るべき道理（大義名分）が無く、官軍である我らには必ずや天の助けが有る筈だから、絶対に怯（ひる）んではならない。死力を尽くして踏ん張れ！」  
両軍の間で数時間の死闘が続き、其の中に暮れ易い冬日が西に傾いてきた。大将の平貞盛から皮肉を言われた政府軍は一念発起して頑張ったので次第に劣勢を挽回することが出来たらしい。

原本には、貞盛に煽てられた兵が「李陵王の様な勇猛心をふるい起して…」と書いてある。是は最初の頃に将門と叔父の良正とが戦った際に使われた表現で、古代中国の勇将の様に…と言う意味であるらしい。追撃する貞盛軍が次第に優勢になってきたことになる。其の時代には悪魔、払いの儀式として桑の弓で蓬（よもぎ）の矢を射ることが行われていたようで原本にも「桑の弓」「蓬の矢」と書いてあるが合戦で贅沢は言っていられない。思いの俣に弓が引けた、と言うことである。而も貞盛軍が放つ矢が効率良く敵に当たった。

是に対して多分、布陣した場所の地形や風向きにも依るのであるが、将門軍は思う存分に戦うことが出来ない。さすがの将門も此の状況を不利と覺つて後陣に身を避け楯を前方に出して防戦に

努めるほかは無かったのである。この結果、昨日まで勝ち戦を続けて来た勢力は一転して敗軍となり貞盛が率いた常陸国の軍勢が勝利を収めた。

敗れた将門が率いていたのは主に下総国の兵であるが、其処に留まる事は不可能なので故郷を失う悔しさを堪えながら退却する他はない。代わりに勝利した常陸国の軍勢が大笑いしながら余裕をもって其の地に宿営した。其の場所は将門が本拠としていた現在の岩井から目と鼻の先である。下総国とか常陸国とか言っても茨城県内であるから県民同士の戦いになるので大笑いはできないけれども、その後は貞盛と秀郷ら攻撃軍の首脳部が現地で作戦会議を開き意見を交わした。其の結果、次の様な結論に達し、貞盛が意見を述べた。

「平将門が勇猛な武将だと言っても寿命が千年も有る訳では無い。我々と同じ短い人生である。其れなのに、将門だけが現代に蔓延（はびこ）り大きな障害となっている。すなわち下総国外まで出張って朝（あした）には乱暴を働き、夕べには勢力を誇示して多くの人々を苦しめていた。其の被害は地元の木食虫や他国の毒蛇よりも酷い。」

昔の話として、靈力の有る大蛇（神の使いと言われた蛇）を斬って世の中を平和にし、巨大な鯨を退治して庶民を助けたという事例がある。漢国の書によれば大蛇は悪人のことであり、鯨の話は凶悪な人物が弱い国を滅ぼした例であるとする。そうであるならば、正に凶悪な人物（将門）を殺害して其の反乱を鎮めることは私事で無く世の中の為ということになる。今、是を行わなければ天皇の威信に傷が着くことになるであろう…

中国の古書「尚書」には、天下が平穏でも其の平和を維持する為には戦わねばならぬ。戦士が強

くても其の力を保つ為には戦闘訓練を怠ってはならぬ。と書かれている。今回の合戦に勝利したからと言って、是からの戦さを忘れることは無い。

昔、周の国で武王が病に倒れた際に弟の周公旦が身代わりになると祈願をしたと言うが、此の貞盛らは朝廷の御下命を受けて戦っているのであるから、最後まで敵を追い詰める…

その後、貞盛は近辺の人々を呼び集め言葉巧みに兵士募集を行なった。其の地域は将門の勢力範囲であったが、甘言に乗せられた者たちが応募してきたので是を編成に加え兵力を倍増させた上で天慶三年（九四〇）二月十三日に将門の本拠地へと向かって行ったのである。

## ○北山の決戦

どうせ分かることなので、先に書いておく。此の度の合戦が「平将門の最後の戦さ」になる。通常の合戦物語だと主人公が居なくなれば終りになるのだが原本の「将門記」は余韻が長い。見方を変えれば平将門という人物が一面では悪人と言われながら其れだけでは済まされない人物であった…と言うことになるのだと思う。本文に戻ると――

新皇こと平将門は、旅と合戦とで疲れていると思われ敵を招き寄せて討とうと考え、手持ちの軍勢を率いて猿島（幸島）の広江（広河の江）に潜伏した。此の沼だか湖水だかは現存して居らず鬼怒川の西方に飯沼川、江川が流れている。其の辺り一帯が大きな湿地帯であつたらしい。

そうとは知らず攻め込んで来た平貞盛らの軍勢は、将門の本城とも言える場所に来て敵が居無

いので合戦にならず拍子抜けしていたが、気を取り直して？辺り構わず家屋を壊したり火をつけたりと狂気の沙汰と思える破壊工作を繰り返した。多くの住民は避難をしたが、僅かに残っていた僧侶なども余りの惨状に呆然とする他はなかった。其れらの人々は、自分たちの郷土が破壊される現状を見ても攻めて来た平貞盛らの所業を恨むのでは無く、只々、其の地の統治者である平将門の暴政（統治の不備）を嘆くばかりであつた。

傍線の部分は、被害者意識として少し疑問もあるが、此の物語が書かれた頃は常陸、下総辺りが貞盛系領主の領地になっていたことからの、著者の気兼ねであろうと思っている。

本題に戻ると、平貞盛らは将門の拠点・岩井の居館や城下町らしい場所を焼き払ったけれども肝心の人物が見つけれない。原本には「翌日になると将門は完全武装で居ながら万一の場合の避難経路を考えつつ、心の中に様々な悪事を思い巡らせていた…」と書いてあるが、追い詰められた武将ならば誰でも反撃の手段を考えるであろう。

原本では古代中国の詩人・白居易の言として伝えられる古代中国で悪事を働いた衛方なる人物の行動を将門に被せて罪を強調しているけれども何の意味もなさない。此の人物は容易に捕まらなかつたらしいから、原作者は貞盛が敵の将門を討つのに苦労した事を言いたかつたのかも知れない。

将門は常に八千の兵を擁していたのだが、追い詰められた其の時には僅か四百余の兵しか居らず（八千の兵が未だ集められて居らず）初めの中は現在の岩井市東北部に当る北山に陣を布いた。

一方、攻める側の平貞盛・藤原秀郷連合軍は、将門の拠点・岩井館を焼いたけれども肝心の将門

を見ていないから用心をして陣構えを嚴重にし、あれこれと作戦を練っていた。余計な事だが原本に書いてあるから述べて置くと、貞盛・秀郷連合軍は、中国の詩人・白居易が書物で紹介した子反・養由と言う武芸・戦略の達人が陣中に居る様な強力な布陣をしていた…ということらしい。

天慶三年（九四〇）二月十四日、途中の経緯は原本に書いてないが、午後三時頃に両軍は戦闘を開始した…とは言っても将門方の援軍は未だ到着して居らず、貞盛、秀郷連合軍に比べれば兵力が違い過ぎる。節分は過ぎたから暦では春かも知れないが未だ寒い。当日は強風が吹いていた。

（続く）

## ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>